

研究論文

幼児期の絵本の読み聞かせが就学後の読書に及ぼす影響

吉田 佐治子* ・ 藪中 征代**

The influence that the story-telling of the picture book in the infancy
gives to reading after the attendance at school

Sachiko YOSHIDA Masayo YABUNAKA

【要約】

小学校1・2年生を対象に、幼児期における家庭での絵本の読み聞かせの状況、現在の読書に対する態度等を調査した。その結果は以下の通りであった。すなわち、幼児期に絵本の読み聞かせをしてもらったこどもは、絵本の読み聞かせが好きであり、現在も読み聞かせてもらっており、自分でも絵本を読んでいた。現在、絵本以外の本についても読んでもらっており、自分でも読んでいた。さらには、幼児期に絵本の読み聞かせをしてもらったこどもは、現在、本を読むことが好きであると答えており、読書量も多かった。以上のことから、幼児期の絵本の読み聞かせは、就学後の読書に影響を与えていることが示された。

* 摂南大学

** 聖徳大学

問 題

2001年に「子どもの読書活動の推進に関する法律」(平成13年法律第154号)が成立した。そこでは、こどもの読書活動について、「子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないもの」とされている(第二条)。さらに、この法律を受けて2013年に定められた「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」(「第三次基本計画」)では、「読書を通じて、子どもは読解力や想像力、思考力、表現力等を養うとともに、多くの知識を得たり、多様な文化を理解したりすることができる。また、書籍や新聞、図鑑などの資料を読み深めることを通じて、自ら学ぶ楽しさや知る喜びを体得し、更なる知的探求心や真理を求める態度が培われる」「読書は、子どもが自ら考え、自ら行動し、主体的に社会の形成に参画していくために必要な知識や教養を身に付ける重要な契機となる。特に、社会が急激に変化し、複雑化していく中で、個人が読書活動などを通じて、生涯にわたって絶えず自発的に学ぼうとする習慣を身に付けていくことは大変重要である」とも述べられている。また、筆者らの調査(未公表)では、小学校1・2年生の保護者の98.9%が、こどもの成長にとって読書はとても大切、あるいは大切であると考えていることが示された。このように、こどもの成長・発達にとって読書は大切なものであると広く認識されている。

それでは、こどもは実際にどれくらい本を読んでいるのだろうか。

毎年実施されている小学校4年生から高校生までを対象とした「学校読書調査」の、2014年(第60回)の結果では、同年5月の1ヶ月に読んだ書籍の平均冊数は、小学生が11.4冊、中学生が3.9冊、高校生が1.6冊であった。一方で、同じ1ヶ月に本を1冊も読まなかった「不読者」の割合(不読率)は、小学生で4%、中学生で15%、高校生で49%であった(毎日新聞2014年10月27日東京朝刊)。年によって多少の変動はあるものの、各学校ともこの20年間ほど、1ヶ月の平均読書量は増加傾向にあり、不読率は減少傾向にあり、こどもは本を読むようになってきているといえるだろう。こうしたこと背景として、「第三次基本計画」では、図書館の充実など家庭・地域における取組、朝読書の普及に代表される学校の取組が挙げられており、今後さらに、家庭、地域、学校において、こどもの読書活動を推進するための取組を進めることが必要とされている。

ここでは、家庭に注目したい。こどもがはじめて「本」と出会う場は、多くの場合、家庭であるからである。幼い頃に、親をはじめとするまわりのおとなに絵本を読んでもらったという経験をもつ人は多いであろう。そして、日々繰り返される絵本の読み聞かせの中で、こどもは、本とは何か、本を読むとはどのようなことなのかを知っていくのだと考えられる。

幼少期の本の読み聞かせは、その後の読書量に影響を与えている(毎日新聞社、2014)。2013年に行われた第59回学校読書調査では、就学前に家の人に本を読んでもらったことがあるかを尋ねている。校種や性別による多少はあるが、6割を超えるこどもが、就学前に家の人に本を読んでもらっていた(「よく読んでもらった」「ときどき読んでもらった」の合計)。さらに、「よく読んでもらった」こどもは1ヶ月の読書量が多く、「まったく読んでもらわなかった」こ

どもは不読率が高かった。この傾向は小学生で顕著であり、中学生・高校生では「まったく読んでもらわなかった」こどもでも、現在多くの本を読んでいる場合もある。つまり、就学前の親などからの本の読み聞かせが現在の読書量に与える影響は、こどもが幼いほど大きいといえよう。

だとするならば、学校読書調査が対象としているこどもよりもさらに幼いこどもには、就学前の親などからの読み聞かせは、現在の読書により大きな影響を与えているのではないだろうか。本稿は、この点を明らかにすることを目的とする。

方 法

1. 調査参加者

千葉県内の小学校1校、東京都内の小学校2校の1年生241名（女子108名、男子129名、不明4名）と2年生221名（女子117名、男子102名、不明2名）の児童462名（女子225名、男子231名、不明6名）。

2. 調査内容

調査用紙は、①幼稚園や保育園の時の絵本とのかかわりについての質問、②小学生になってからの読書についての質問、③読書の好き嫌いについての質問から構成されている。質問内容を表1に示した。

3. 調査手続き

担任教師によって、無記名での一斉調査を学級単位で実施した。調査時期は2014年1月から3月である。調査にあたっては、倫理上の配慮から、学校の成績に全く関係ないこと、自分の回答が他人に漏れることは全くないこと、答えたくない質問については答えなくて構わないことなどについて口頭で説明した。そして、児童の回答が終了次第、担任教師によって回収してもらった。なお、有効回収率は、97.5%であった。

結 果

1. 学年差の検討

(1) 幼稚園、保育園の時の読み聞かせ

幼児期の絵本との関わりについて、表2に示す。

① 家庭での絵本の読み聞かせの頻度

家庭での読み聞かせの頻度について、「よく読んでくれた」「時々読んでくれた」を合わせると1年生が78.7%、2年生が81.0%で、ほぼ8割の家庭で、幼児期に絵本の読み聞かせが行われていた。家庭における読み聞かせの頻度に学年差がみられるかについて χ^2 検定を行った結果、有意な差は認められなかった（ $\chi^2(4)=0.71$, n.s.）。

② 絵本の好き嫌い

また、幼児の頃、絵本が好きであったかどうかについて、「とても好き」「好き」を合わせる

表1 学校と本についての質問紙の構成

I. 幼稚園や保育園の時の絵本とのかかわり	
① 「おうちのひとは、えほんをよんでくれましたか」への「1:よくよんでくれた～5:おぼえていない」の5段階評定	
② 「あなたは、えほんがすきでしたか」への「1:とてもすき～4:きらい」の4段階評定	
II. 小学生になってからの読書	
① 「おうちのひとが、えほんをよんでくれることがありますか」への「1:よくよんでくれる～4:よんでくれない」の4段階評定	
② 「じぶんでえほんをよむことがありますか」への「1:よくよむ～4:よまない」の4段階評定	
③ 「おうちのひとが、えほんではない本をよんでくれることはありますか」への「1:よくよんでくれる～4:よんでくれない」の4段階評定	
④ 「じぶんで、えほんではない本をよんでいますか」への「1:よくよむ～4:よまない」の4段階評定	
⑤ 「あなたがじぶんでよむ本はだいたい1か月になんさつぐらいですか」への冊数を記入	
III. 本を読むことの好き嫌い	
① 「本をよむのはすきですか」への「1:とてもすき～5:わからない」の5段階評定	

表2 幼稚園、保育園の時の読み聞かせ

	1年生		2年生		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%
① 家庭での絵本の読み聞かせの頻度						
よく読んでくれた	107	44.4	99	44.8	206	44.6
時々読んでくれた	83	34.4	80	36.2	163	35.3
あまり読んでくれなかった	13	5.4	11	5.0	24	5.2
読んでくれなかった	11	4.6	11	5.0	22	4.8
覚えていない	27	11.2	20	9.0	47	10.2
② 絵本の好き嫌い						
とても好き	120	49.8	117	52.9	237	51.3
好き	86	35.7	86	38.9	172	37.2
どちらかという嫌い	22	9.1	13	5.9	35	7.6
嫌い	13	5.4	5	2.3	18	3.9

と、1年生では85.5%，2年生では91.8%の児童が好きだったと回答している。幼児期の絵本の好き嫌いに学年差が認められるかどうかについて χ^2 検定を行った結果、有意な差は認められなかった ($\chi^2(3)=5.05, n.s.$)。

(2)小学生になってからの読書

小学生になってからの読書について、表3に示す。

①家庭での絵本の読み聞かせの頻度

表3 小学生になってからの読書

① 家庭での絵本の読み聞かせの頻度						
	1年生		2年生		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%
よく読んでくれる	63	26.1	43	19.5	106	22.9
時々読んでくれる	103	42.7	79	35.7	182	39.4
あまり読んでくれない	33	13.7	47	21.3	80	17.3
読んでくれない	42	17.4	52	23.5	94	20.3
② 自分で絵本を読む頻度						
よく読む	121	50.2	120	54.3	241	52.2
時々読む	79	32.8	67	30.3	146	31.6
あまり読まない	31	12.9	27	12.2	58	12.6
読まない	10	4.1	7	3.2	17	3.7
③ 家庭での絵本以外の読み聞かせの頻度						
よく読んでくれる	41	17.0	40	18.2	81	17.6
時々読んでくれる	60	24.9	59	26.8	119	25.8
あまり読んでくれない	34	14.1	40	18.2	74	16.1
読んでくれない	106	44.0	81	36.8	187	40.6
④ 自分で絵本以外の本を読む頻度						
よく読む	98	40.7	109	49.3	207	44.8
時々読む	74	30.7	61	27.6	135	29.2
あまり読まない	33	13.7	25	11.3	58	12.6
読まない	36	14.9	26	11.8	62	13.4

小学生になってからの家庭での絵本の読み聞かせの頻度について、小学生になっても家庭で絵本を読み聞かせてもらっている児童は、「よく読んでくれる」「時々読んでくれる」を合わせると1年生で68.8%、2年生で55.2%であった。幼児期に比べると減少はしているが、継続している家庭が存在していることが明らかとなった。家庭での絵本の読み聞かせの頻度に学年差がみられるかについて χ^2 検定を行った結果、有意な差は認められなかった($\chi^2(4)=0.71$, n.s.)。

②自分で絵本を読む頻度

自分で絵本を読んでいる児童は、「よく読む」「時々読む」を合わせると1年生で83.0%、2年生で84.6%であり、1年生、2年生ともに8割強の児童が自分で絵本を読んでいた。自分で絵本を読む頻度に学年差がみられるかについて χ^2 検定を行った結果、有意な差は認められなかった($\chi^2(3)=0.93$, n.s.)。

③家庭での絵本以外の本の読み聞かせ頻度

小学生になっても家庭で絵本以外の本を読み聞かせてもらっている児童は、「よく読んでくれる」「時々読んでくれる」を合わせると1年生で41.9%、2年生で45.0%であった。家庭で絵

表4 本を読むことの好き嫌い

	1年生		2年生		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%
とても好き	129	53.5	138	62.4	267	57.8
まあまあ好き	86	35.7	61	27.6	147	31.8
あまり好きではない	7	2.9	14	6.3	21	4.5
嫌い	6	2.5	4	1.8	10	2.2
わからない	13	5.4	4	1.8	17	3.7

表5 1ヵ月の読書量

	平均値(冊)	標準偏差
1年生	19.95	26.55
2年生	20.27	30.61

本以外の本の読み聞かせの頻度に学年差がみられるかについて χ^2 検定を行った結果、有意な差は認められなかった ($\chi^2(3)=2.90$, n.s.)。

④自分で絵本以外の本を読む頻度

自分で絵本以外の本を読んでいる児童は、「よく読む」「時々読む」を合わせると1年生で71.4%、2年生で76.9%である。自分で絵本以外の本を読む頻度に学年差がみられるかについて χ^2 検定を行った結果、有意な差は認められなかった ($\chi^2(3)=3.69$, n.s.)。

(3)本を読むことの好き嫌い

本を読むことの好き嫌いの結果を、表4に示す。本を読むことの好き嫌いは、「とても好き」「まあまあ好き」を合わせると1年生で89.2%、2年生で90.0%であり、1年生、2年生ともに約9割の児童が本を読むことが好きであると答えていた。本を読むことの好き嫌いに学年差がみられるかについて χ^2 検定を行った結果、有意な差は認められなかった ($\chi^2(4)=4.68$, n.s.)。

(4)1ヵ月の読書量

1ヵ月の読書量について、表5に示した。読書量に学年差がみられるかについて t 検定を行った結果、学年差は認められなかった ($t(460)=-0.12$, n.s.)。

(5)学年差について

それぞれの質問項目を学年ごとに分析した結果、すべての項目で差が認められなかった。そこで、これ以降の分析においては1年生と2年生のデータを込みにして分析することとした。

表 6 幼児期の家庭での絵本の読み聞かせの頻度と絵本の好き嫌い

			幼児期の絵本の好き嫌い				合計
			とても好き	好き	どちらかという と嫌い	嫌い	
絵本の読み聞かせの頻度 幼児期の家庭での	よく読んでくれた	度数	145	48	8	3	204
		%	71.1%	23.5%	3.9%	1.5%	100.0%
		調整済み残差	7.3 *	-5.8 *	-2.0	-1.9	
	時々読んでくれた	度数	63	85	8	7	163
		%	38.7%	52.1%	4.9%	4.3%	100.0%
		調整済み残差	-4.7 *	5.0 *	-0.9	1.1	
	あまり読んでくれなかった	度数	3	13	7	1	24
		%	12.5%	54.2%	29.2%	4.2%	100.0%
		調整済み残差	-4.1 *	1.7	4.8 *	.3	
	読んでくれなかった	度数	8	9	3	2	22
		%	36.4%	40.9%	13.6%	9.1%	100.0%
		調整済み残差	-1.6	.3	1.5	1.6	
	全体	度数	219	155	26	13	413
		%	53.0%	37.5%	6.3%	3.1%	100.0%

* p<.05

2. 幼児期の家庭での絵本の読み聞かせの影響

家庭での絵本の読み聞かせの頻度において、覚えていない児童が 47 名（1 年生 27 名，2 年生 20 名）いたので，そのデータを今回の分析からは外した。

(1) 幼児期の絵本の読み聞かせの好き嫌い

幼児期の家庭での読み聞かせの頻度と絵本の好き嫌いに差がみられるかについて χ^2 検定を行った結果，有意な差が認められた ($\chi^2(9) = 78.45$, $p < .001$)。そこで，残差分析を行った結果を表 6 に示した。

(2) 児童期の家庭での絵本の読み聞かせ体験

幼児期の家庭での読み聞かせの頻度と児童期の絵本の読み聞かせの頻度に差がみられるかについて χ^2 検定を行った結果，有意な差が認められた ($\chi^2(9) = 110.49$, $p < .001$)。そこで，残差分析を行った結果を表 7 に示した。

(3) 児童期の家庭での絵本以外の読み聞かせ体験

幼児期の家庭での読み聞かせの頻度と児童期の絵本以外の読み聞かせの頻度に差がみられるかについて χ^2 検定を行った結果，有意な差が認められた ($\chi^2(9) = 52.79$, $p < .001$)。そこで，残差分析を行った結果を表 8 に示した。

(4) 児童期の自分で絵本を読む経験

表7 幼児期の家庭での絵本の読み聞かせの頻度と児童期の家庭での絵本の読み聞かせの頻度

			児童期の家庭での絵本の読み聞かせの頻度				合計
			よく読んでくれる	時々読んでくれる	あまり読んでくれない	読んでくれない	
絵本の読み聞かせの頻度 幼児期の家庭での	よく読んでくれた	度数	80	80	21	24	205
		%	39.0%	39.0%	10.2%	11.7%	100.0%
		調整済み残差	7.7 *	-.9	-3.4 *	-3.9 *	
	時々読んでくれた	度数	13	80	39	30	162
		%	8.0%	49.4%	24.1%	18.5%	100.0%
		調整済み残差	-5.8 *	2.7 *	3.3 *	-.4	
	あまり読んでくれなかった	度数	1	7	6	10	24
		%	4.2%	29.2%	25.0%	41.7%	100.0%
		調整済み残差	-2.3 *	-1.2	1.2	2.8 *	
	読んでくれなかった	度数	1	3	2	16	22
%		4.5%	13.6%	9.1%	72.7%	100.0%	
調整済み残差		-2.1 *	-2.7 *	-1.0	6.5 *		
全体	度数	95	170	68	80	413	
	%	23.0%	41.2%	16.5%	19.4%	100.0%	

* p<.05

表8 幼児期の家庭での絵本の読み聞かせの頻度と児童期の家庭での絵本以外の本の読み聞かせ頻度

			児童期の家庭での絵本以外の本の読み聞かせの頻度				合計
			よく読んでくれる	時々読んでくれる	あまり読んでくれない	読んでくれない	
絵本の読み聞かせの頻度 幼児期の家庭での	よく読んでくれた	度数	61	43	30	60	194
		%	31.4%	22.2%	15.5%	30.9%	100.0%
		調整済み残差	6.2 *	-1.2	-.7	-3.4 *	
	時々読んでくれた	度数	13	45	33	66	157
		%	8.3%	28.7%	21.0%	42.0%	100.0%
		調整済み残差	-4.4 *	1.4	1.8	.9	
	あまり読んでくれなかった	度数	0	8	1	15	24
		%	0.0%	33.3%	4.2%	62.5%	100.0%
		調整済み残差	-2.5 *	1.0	-1.7	2.4 *	
	読んでくれなかった	度数	1	2	2	14	19
%		5.3%	10.5%	10.5%	73.7%	100.0%	
調整済み残差		-1.6	-1.5	-.7	3.1		
全体	度数	75	98	66	155	394	
	%	19.0%	24.9%	16.8%	39.3%	100.0%	

* p<.05

幼児期の家庭での読み聞かせの頻度と児童期の自分で絵本を読む頻度に差がみられるかについて χ^2 検定を行った結果、有意な差が認められた ($\chi^2(9)=22.00, p<.01$)。そこで、残差分析を行った結果を表9に示した。

表9 幼児期の家庭での絵本の読み聞かせの頻度と児童期の自分で絵本を読む頻度

			児童期の自分で絵本を読む頻度				合計
			よく読む	時々読む	あまり 読まない	読まない	
絵本の読み聞かせの頻度 幼児期の家庭での	よく読んでくれた	度数	121	49	24	8	202
		%	59.9%	24.3%	11.9%	4.0%	100.0%
		調整済み残差	2.6 *	-2.9 *	-.2	.6	
	時々読んでくれた	度数	81	60	17	3	161
		%	50.3%	37.3%	10.6%	1.9%	100.0%
		調整済み残差	-1.0	2.3 *	-.8	-1.4	
	あまり読んでくれなかった	度数	5	9	7	2	23
		%	21.7%	39.1%	30.4%	8.7%	100.0%
		調整済み残差	-3.1 *	.9	2.7 *	1.4	
	読んでくれなかった	度数	11	8	2	1	22
%		50.0%	36.4%	9.1%	4.5%	100.0%	
調整済み残差		-.3	.6	-.5	.3		
全体	度数	218	126	50	14	408	
	%	53.4%	30.9%	12.3%	3.4%	100.0%	

* p<.05

表10 幼児期の家庭での絵本の読み聞かせの頻度と児童期の自分で絵本以外の本を読む頻度

			児童期の自分で絵本以外の本を読む頻度				合計
			よく読む	時々読む	あまり 読まない	読まない	
絵本の読み聞かせの頻度 幼児期の家庭での	よく読んでくれた	度数	111	48	20	21	200
		%	55.5%	24.0%	10.0%	10.5%	100.0%
		調整済み残差	3.7 *	-1.9	-.9	-2.1 *	
	時々読んでくれた	度数	60	52	21	25	158
		%	38.0%	32.9%	13.3%	15.8%	100.0%
		調整済み残差	-2.6 *	1.7	1.0	.8	
	あまり読んでくれなかった	度数	5	7	3	8	23
		%	21.7%	30.4%	13.0%	34.8%	100.0%
		調整済み残差	-2.4 *	.2	.3	2.9 *	
	読んでくれなかった	度数	10	7	2	3	22
%		45.5%	31.8%	9.1%	13.6%	100.0%	
調整済み残差		-.1	.4	-.4	-.1		
全体	度数	186	114	46	57	403	
	%	46.2%	28.3%	11.4%	14.1%	100.0%	

* p<.05

(5) 児童期の自分で絵本以外の本を読む経験

幼児期の家庭での読み聞かせの頻度と児童期の自分で絵本以外の本を読む頻度に差がみられるかについて χ^2 検定を行った結果、有意な差が認められた ($\chi^2(9)=21.80, p<.01$)。そこ

表11 幼児期の絵本の読み聞かせの頻度と児童期の本を読むことの好き嫌い

			児童期の本を読むことの好き嫌い					合計
			とても好き	まあまあ好き	あまり好きではない	嫌い	わからない	
絵本の読み聞かせの頻度	よく読んでくれた	度数	147	47	4	3	4	205
		%	71.7%	22.9%	2.0%	1.5%	2.0%	100.0%
		調整済み残差	4.8 *	-3.8 *	-2.4 *	-.7	.0	
	時々読んでくれた	度数	80	66	9	4	3	162
		%	49.4%	40.7%	5.6%	2.5%	1.9%	100.0%
		調整済み残差	-3.5 *	3.1 *	.9	.6	-.1	
	あまり読んでくれなかった	度数	6	12	3	1	1	23
		%	26.1%	52.2%	13.0%	4.3%	4.3%	100.0%
		調整済み残差	-3.4 *	2.2 *	2.1 *	.9	.9	
	読んでくれなかった	度数	14	6	2	0	0	22
		%	63.6%	27.3%	9.1%	0.0%	0.0%	100.0%
		調整済み残差	.4	-.5	1.1	-.7	-.7	
合計		度数	247	131	18	8	8	412
		%	60.0%	31.8%	4.4%	1.9%	1.9%	100.0%

* p<.05

表12 幼児期の絵本の好き嫌いとは児童期の本を読むことの好き嫌い

			児童期の本を読むことの好き嫌い					合計
			とても好き	まあまあ好き	あまり好きではない	嫌い	わからない	
幼児期の絵本の好き嫌い	とても好き	度数	191	25	2	1	0	219
		%	87.2%	11.4%	.9%	.5%	0.0%	100.0%
		調整済み残差	12.0 *	-9.4 *	-3.7 *	-2.3 *	-3.1 *	
	好き	度数	48	88	12	0	5	153
		%	31.4%	57.5%	7.8%	0.0%	3.3%	100.0%
		調整済み残差	-9.2 *	8.7 *	2.6	-2.2 *	1.5	
	どちらかという嫌い	度数	6	11	3	3	3	26
		%	23.1%	42.3%	11.5%	11.5%	11.5%	100.0%
		調整済み残差	-4.0 *	1.2	1.8	3.7 *	3.7 *	
	嫌い	度数	2	6	1	4	0	13
		%	15.4%	46.2%	7.7%	30.8%	0.0%	100.0%
		調整済み残差	-3.3 *	1.1	.6	7.6 *	-.5	
合計		度数	247	130	18	8	8	411
		%	60.1%	31.6%	4.4%	1.9%	1.9%	100.0%

* p<.05

で、残差分析を行った結果を表10に示した。

(6)本を読むことの好き嫌い

幼児期の家庭での読み聞かせの頻度と本を読むことの好き嫌いには差がみられるかについて χ^2 検定を行った結果、有意な差が認められた ($\chi^2(12)=35.54, p<.001$)。そこで、残差分析

表13 幼児期の絵本の読み聞かせの頻度と児童期の読書量との関係
(N=415)

		人数	平均値	標準偏差
度読幼 み児 聞期 か の せ 絵 の本 頻の	よく読んでくれた	206	23.9	29.9
	時々読んでくれた	163	15.0	17.4
	あまり読んでくれなかった	24	14.7	18.0
	読んでくれなかった	22	28.1	66.5
	合計	415	20.1	28.7

表14 幼児期の絵本の好き嫌いとは児童期の読書量との関係

		人数	平均値	標準偏差
度読幼 み児 聞期 か の せ 絵 の本 頻の	とても好き	237	25.0	30.1
	好き	172	14.4	16.2
	どちらかという嫌い	35	17.4	52.0
	嫌い	18	16.4	27.4
	合計	462	20.1	28.5

を行った結果を表 11 に示した。

幼児期の絵本の読み聞かせの好き嫌いとは児童期の本を読むことの好き嫌いに差が見られるかについて χ^2 検定を行った結果、有意な差が認められた ($\chi^2(12)=225.56, p<.001$)。そこで、残差分析を行った結果を表 12 に示した。

(7) 児童期の読書量

幼児期の絵本の読み聞かせの頻度と児童期の読書量について、表 13 に示した。ここでは、「覚えていない」と回答した 47 名の回答を分析対象から外し、「よく読んでくれた」～「読んでくれなかった」の 4 段階で評定した 415 名を分析対象とした。幼児期の絵本の読み聞かせの頻度と児童期の読書量との関係を明らかにするために、1 要因の分散分析を行った結果、有意な差が認められた ($F(3,411)=3.88, p<.01$)。多重比較の結果、幼児期に絵本を「読んでくれなかった」>「よく読んでくれた」>「時々読んでくれた」・「あまり読んでくれなかった」となった。

また、幼児期の絵本の好き嫌いとは児童期の読書量について、表 14 に示した。幼児期の絵本の好き嫌いとは児童期の読書量との関係を明らかにするために、1 要因の分散分析を行った結果、有意な差が認められた ($F(3,458)=4.95, p<.01$)。多重比較の結果、絵本は「とても好き」>「どちらかという嫌い」>「嫌い」>「好き」となった。

考 察

幼児期に、家庭で絵本の読み聞かせをしてもらった（「よく読んでくれた」「ときどき読んでくれた」）こどもは約 8 割にのぼり、9 割近いこどもが絵本の読み聞かせが好き（「とても好き」

「好き」だと答えている。この数値は、毎日新聞社（2014）のものに近く、質問が「絵本の読み聞かせ」と「本の読み聞かせ」という違いはあるものの、現在多くの家庭で、子どもへの読み聞かせが行われていることを示すものである。さらに、子どもはそれを好意的に受け止めていることも示された。藪中・吉田・村田（印刷中 a）では、本調査の対象となった児童の保護者を対象とし、絵本の読み聞かせについての調査を行っているが、約 3/4 の保護者が、就学前に週に 2～3 回以上、絵本の読み聞かせを行ったと答えており、子どもと保護者との認識がほぼ一致していることも窺える。

幼児期に絵本の読み聞かせをしてもらった子どもは、絵本の読み聞かせが好きであり、現在も読み聞かせてもらっており、自分でも絵本を読んでいる（「よく読む」「ときどき読む」）。また、幼児期に絵本の読み聞かせをしてもらった子どもは、現在、絵本以外の本についても、読んでもらっており、自分でも読んでいる。さらには、幼児期に絵本の読み聞かせをもらった子どもは、現在、本を読むことが好きであると答えており、読書量も多い。

以上の結果から、幼児期の絵本の読み聞かせは、就学後の読書に影響を与えているといえる。

藪中・吉田（印刷中 b）は、本調査の対象となった児童の保護者に、絵本の読み聞かせについて尋ねているが、ほとんどの保護者が幼少期の絵本の読み聞かせは大切（「とても大切」「大切」）だと答えている。また、絵本の読み聞かせの意義についての質問に対する回答（14 項目から第 1 位～第 3 位までを選択）では、「子どもが本を好きになる」を第 1 位として選んだ人が 2 割を超えて 2 番目に多く、第 3 位までを含めるとほぼ 5 割の保護者が本項目を選択している。保護者は、子どもが幼い頃、子どもが本好きになることを期待して絵本を読み聞かせ、子どもは現在、その期待通りに本が好きなのである。また、藪中・吉田（印刷中 c）では、同じ保護者を対象とした調査で、幼い頃の絵本の読み聞かせが大切だと考える人ほど、子どもの成長にとって読書が大切だと考えていることも示されている。こうした親の絵本の読み聞かせに対する認識とそれに伴う実際の読み聞かせ行動、さらに、読書に対する認識が、子どもの読書行動に影響を与えているものと考えられる。

ここで興味深いのが、幼児期に「絵本を読んでもらわなかった」子どもである。本調査では、幼児期の家庭での絵本の読み聞かせについて、「よく読んでくれた」「ときどき読んでくれた」「あまり読んでくれなかった」「読んでくれなかった」「覚えていない」の中から選んで回答することを求めた。約 1 割の「覚えていない」児童を除いて、幼児期の絵本の読み聞かせと現在の読書について分析を行ったわけであるが、「よく読んでくれた」「ときどき読んでくれた」「あまり読んでくれなかった」児童については、上で述べたとおり、読んでもらった程度が高いほど、現在、読書が好きであり、読書量も多い。しかし、「読んでくれなかった」子どもは、当時、絵本が好きであったし、現在は、自分で絵本や絵本以外の本をよく読み、本を読むことがとても好きであると答えている。また、読書量も多い。その程度は、質問項目にもよるが「よく読んでくれた」と答えた児童と同程度である。毎日新聞社（2014）では、小学校 4 年生以上の児童・生徒については、就学前の親などからの本の読み聞かせが現在の読書量に与える影響は、子どもが幼いほど大きいことが示されたが、より幼い本調査参加者については、これはあてはまらないのである。

このような“逆転”は、なぜ起こるのだろうか。いくつかの理由が考えられる。

まず、家庭以外の場での経験である。多くの幼稚園や保育所では、絵本の読み聞かせを行っており、また、書店には多数の絵本が並んでいる。就学するまで絵本とまったく未接触であったという児童は極めて稀であろう。また、就学後は、教師から本を読んでもらった経験のある児童は多く（毎日新聞、2014）、いわゆる「朝読書」も広く定着している（「第三次基本計画」）。このような経験を通して、絵本や本の楽しさを知っていくものと考えられる。

また、幼児期に絵本を読んでもらわなかったこどもにとって、絵本や本を読むことは“特別”なことなのかもしれない。よく読んでもらったこどもにとっては、絵本や本は身近なものであり、それらを読むことは日常生活の中に、ごく自然なこととして組み込まれていると考えられる。そのため、読書が好きで、読む量も多くなるのであろう。しかし、絵本を読んでもらわなかったこどもにとっては、そうではない。絵本の読み聞かせは、普段の生活の中ではあまり遭遇することのない“特別”な経験であるが、そのような機会があった際にその楽しさは知っている。日常的なことではないからこそ、却ってそれを求めるようになるのではないだろうか。そして、小学校に入学し、文字を覚え、文章を読めるようになったことで、自分自身で本を読むことができるようになり、それまでの欲求を満たしているのではないかと考えられよう。毎日新聞社（2014）が対象としている小学校4年生ともなると、教科書も含め、本を読むことは特別なことではなくなる。むしろ、“勉強”色が強くなり、敬遠されることも考えられる。そのようなとき、日常生活の中の自然な習慣として読書が位置づけられていなかったこどもは、自然と本を読むことから離れていくのかもしれない。

本稿では、不読率については特に検討を行わなかった。しかしながら、表 13・14 をみると、不読者が一定数いることが予想され、それは、幼児期の絵本の読み聞かせの頻度や絵本の好き嫌いに関わらない。つまり、小学校低学年で、既に本を読む児童と本を読まない児童とに分かれていることが推測される。第 60 回学校読書調査の結果や「第三次基本計画」にみられるように、学校が進むにつれて不読者が多くなることが問題視されているが、それは小学校低学年から始まっていることが予想される。本を読むこどもと読まないこども。その違いはどこから生じるのか、特に、家庭での働きかけはどのような影響を及ぼしているのか、今後さらに探っていくことが必要であろう。

文 献

文部科学省 2013 子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画

毎日新聞社 2014 読書世論調査 2014 版 毎日新聞東京本社

藪中征代・吉田佐治子・村田光子 印刷中 a 養育者の絵本に対する考え—児童期を中心として— 日本保育学会第 68 回大会発表要旨集

藪中征代・吉田佐治子 印刷中 b 子どもへの絵本の読み聞かせに対する親の考え—0 歳児, 5 歳児, 小学 2 年生の比較を通して— 聖徳大学研究紀要 児童学部 人文学部 音楽学部

藪中征代・吉田佐治子 印刷中 c 絵本をめぐる親子のやりとりー児童期の養育者の絵本に対する考えー 日本発達心理学会第26回大会論文集

【付記】 調査にご協力いただきました小学校の先生方と児童のみなさまに心より感謝申し上げます。

本研究は、科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号 23500890：研究代表者：藪中征代）の補助を受けて行われた。